

# 明治初期の実測絵地図（堺県星田 邨萬分之六図）で星田の山を歩く

ポケットGPSで現存する道をたどる。

## 堺県星田郷実測絵図について 明治維新後の星田について

明治5年2月河内国第5区に編入(それまでは交野郡星田郷)

同7年 堺県第3大区3小区

同13年2月 区の名称を廃止

同14年2月 堺県を「廃止。大阪府交野郡星田村となり、戸長(村長のこと。)制となる。(役場は、光林寺内。村内、422戸、人口11961人で北河内で一番人口が多かった。)

地図の市街部分は昔の小字の地名を描いておりそのうち宅地(現在の市街地)部分は地図の下部分の黒く塗られているところである。

### 星田の山は禿山が多かった

この地図の山は、山林、藪地、砂山などの環境を標示しているが、山林が少なく藪地、砂山が多かった。

地図の中央東よりの妙見山は、昔から縄文の森といはれ、森林であったがそれと対比すれば樹木の少なさがよくわかる。また南側(この地図は南上位に作られている。)の里山部分でも東側の磐船神社に近い現在の府民の森と西側のぼって谷以西の地域は多少樹木が描かれているが星田山から廃小松寺があった小松にかけての中央部分の砂山や藪地が目立ち禿山であったことがよくわかる。



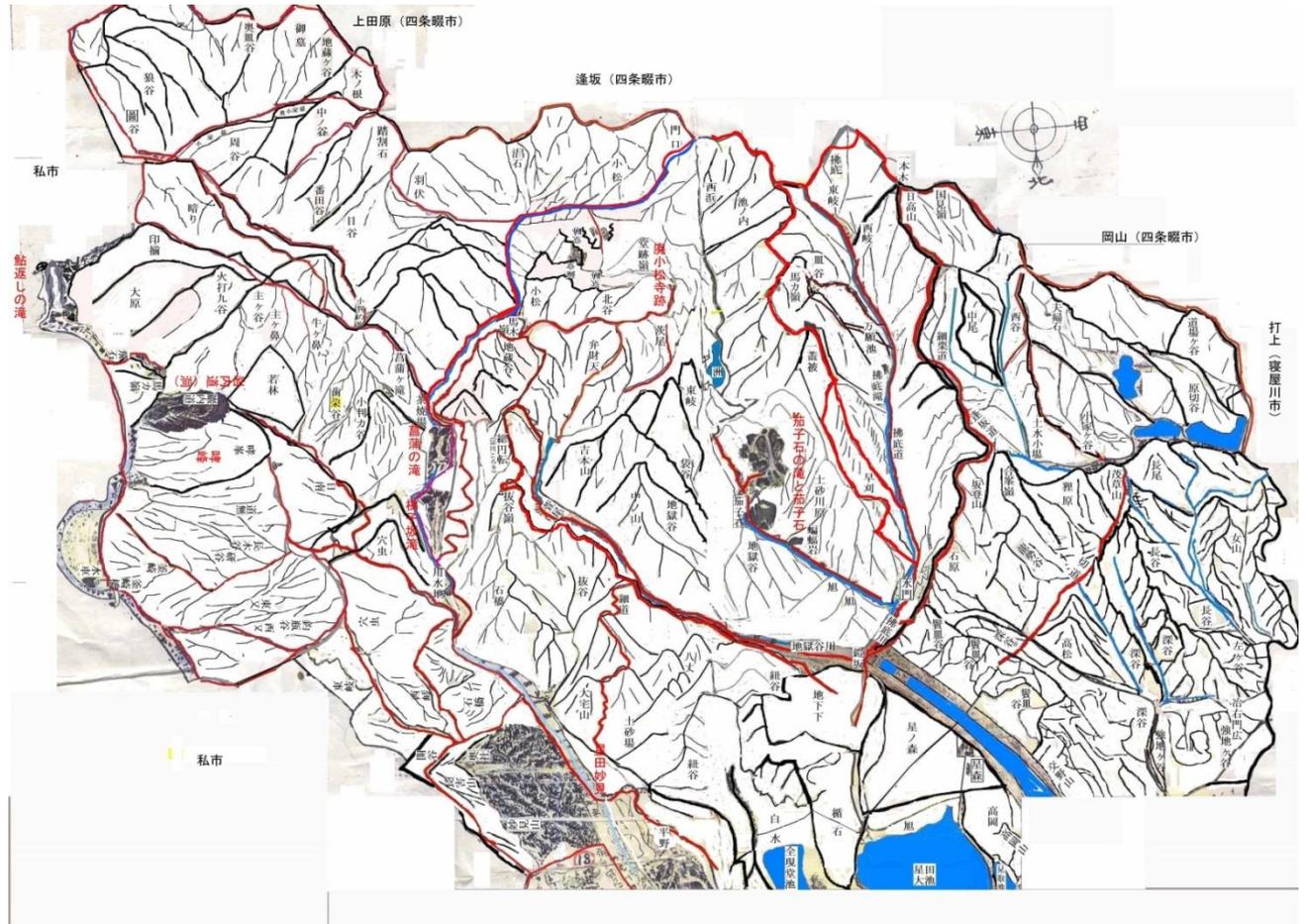
## 堺県星田邨実測絵地図加工図(山岳ID地図版)

明治の地図は、立体(ID)地図で作られている。

この地図は、原図から樹木、藪、砂山などの合印(凡例のこと)のマークを全て取り除き、下図の山の形や道のルート図だけを残し、見やすく加工したものである。

普通の山岳地図は、第3図(GPSで歩く星田の全山と地名)のように上部から見た平面高低図で描かれているが、この明治の地図では、側面から見た投影画面、つまり立体(ID)画面で描かれている。立体画面の場合、東西南北いろんな角度からの投影が可能であるが、この明治の地図の場合、全般的には北から南(地図全体は南上位であり、上方向。)に向かった投影図で描かれているが場所によって例えば哮峰周辺は、東から西の投影画面、星田妙見の妙見山付近は、西から東の投影画面で描かれている。

隣接する四条畷市や寝屋川市との境界域は、交野市との境界線が境界雄根筋の上に作られているので、境界線の形は、全て分水雄根筋で内側は昇りの傾斜になっていて、現状の形とうまく合致している。哮峰、星田妙見周辺など投影方向が異なる地域間の影になる部分では、一部調整が行われていて複雑な形になっている。





# 星田の山の区分図

府民の森星田園地  
哮が峯・鮎返し滝

里山の東部  
廃小松寺とその  
参道

里山の中部  
生活の山、星田山  
と星田新池

里山の西部  
逢坂道、西谷  
と久保池



星田の山を府民の森星田園地と星田の里山に大きく2つに分け、星田の里山はその山中をなすび石の谷とぼって谷の2つの谷が3つに分断しているため、東部、中部、西部に分けている。

里山の中部 生活の山 星田山と星田新池



## 星田新池の築造(明治43年)と旭縄文遺跡の発見



星田新池は、明治43年頃築造であり明治の地図には記載されていない。なすび石の谷とぼって谷の両谷が合流し、拂底川となって地獄谷川と合流し、傍示川となっていた。星田新池の築造は、地獄谷川に沿って並んでいる2つの富士山の形をしていた旭の山を取り崩し、両谷のところまで持ち上げ

堤防を作ったが、旭の山の取り崩し中に10数個の縄文住宅遺跡が見つかった。大きいもので八畳ぐらいで、人の体の3分の1位の穴を掘り、6m位の丈の竹や材木を刺して先を藁で結び、葦や萱の茎を並べて造っていた。壁にあたる部分は粘土ではりつけてあった。

部屋の中央に火を使った炉の跡があり、灰に混じって小鳥や小動物の骨などが出てきた。

### 星田新池周辺で見つかった埋蔵金

- 1 縄文住居跡遺跡発掘の際に中国の2000年前の通貨「貨泉」が貝殻に入って発見
- 2 星田新池の南側の早川の半島から土器に入った数十枚の和同開珎が発見
- 3 土手と隣接する山との取り付け部分の大正期の工事中に4枚の和同開珎と平安以前の中国の貨幣64枚発見

### 星田村元禄絵図が描いている傍示川あれ(河川の氾濫被害地)

絵図の銀杏の葉のような形をした星田大池の南側に傍示川あれ東西96間(176m)南北77間(135m)が描かれている。なすび石の谷の東側の地名は地獄谷というが、これは牛馬の死体の捨て場などに付けられる名前であるが、地域が広範なことから、傍示川の上流を地獄谷川と呼ぶことを考えると星田新池築造前は、この付近では大雨時は、生地獄を味わうような雰囲気になることからの命名でないかとも考えられる。



### 地下下(星田新池からの拂底川が傍示川に流入している地点の北側の地名)の歴史

前絵図の傍示川あれはこの地点であろう。この付近は昭和30年頃まで家が一軒もなかった

ところである。この地に「地下々の比丘尼(びくに)の色香に迷よて、すってんころりの山法師」という歌が残っている。廃小松寺時代には、このあたりは参道として日用品を売る店などが栄え、参拝客や山中の僧侶などを相手にするピンクゾーンがあったとされる。

またこの地に星田出身の源姓の星田次郎右衛門正種という武士が住んでいたが、この人は、7歳で11歳の豊臣秀頼に嫁いできた千姫の取次役で大阪落城のあと千姫について江戸に帰った。 (寛政系図)



星田村絵図 (元禄10年 1697)



**星田山山頂馬ガ峰**

馬の胴体みたいな形をしているのでこのような名前がついたのであろう。三角点の標柱があるだけでなにもない。この周辺は明治期に杉、檜など植樹が行われている。  
(日露戦争祝勝記念府営農林。)



**一蓋被**

前峰にあり、巨石の上からは、180度以上の山中随一の展望台である。



**聖滝となすび石**

生駒山系三滝の1にあげられる聖滝である。夫婦滝になっていて2箇所から落下している。



**蝙蝠石**

蝙蝠が羽を広げたような形をした石であり、現存している。



途中から流れを斜めに交える風情のある滝である。  
**ぼつて滝**

この滝のそばに昔は、右側の茄子石といわれる大岩があって、この滝は、茄子石の滝とよばれていたが、20数個の庭石になって処分されてしまった。



**万願池の跡**

土砂で埋まってしまって今はない。山に植林が行われ結果



**五段滝**



**ひさきの淵**  
昔は瓢箪の形をしていたので、瓢箪(ひさき)の淵とよばれていた。この池は、深淵で、濁れることが一度もなく、波をたてず、静まりかえっていた姿は凄絶であったといわれる。現在は、ゴルフ場の敷地内で調整池として形が変わって使われている。



## 明治の地図が描く小松山



### 北側から見た小松山

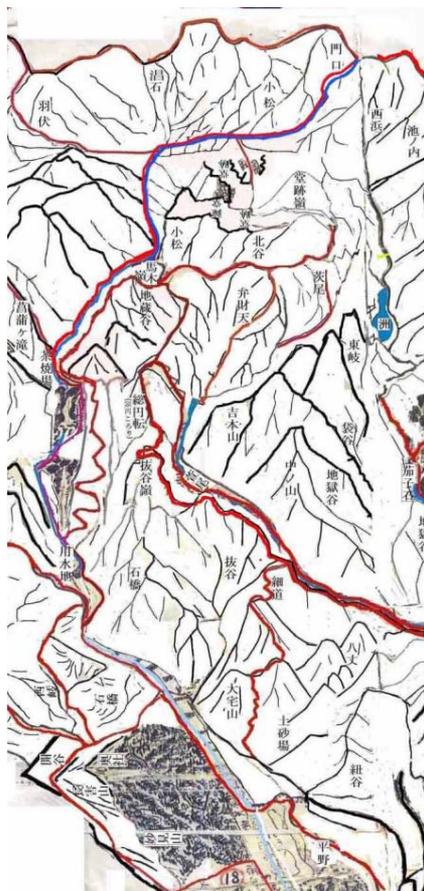
小松、北谷の文字と堂跡、鐘堂の文字が逆さに書かれている。これは、小松、北谷の面は北側から見た絵図で、堂跡、鐘堂から小松山の南斜面は南側から見た絵図が書かれているからである。



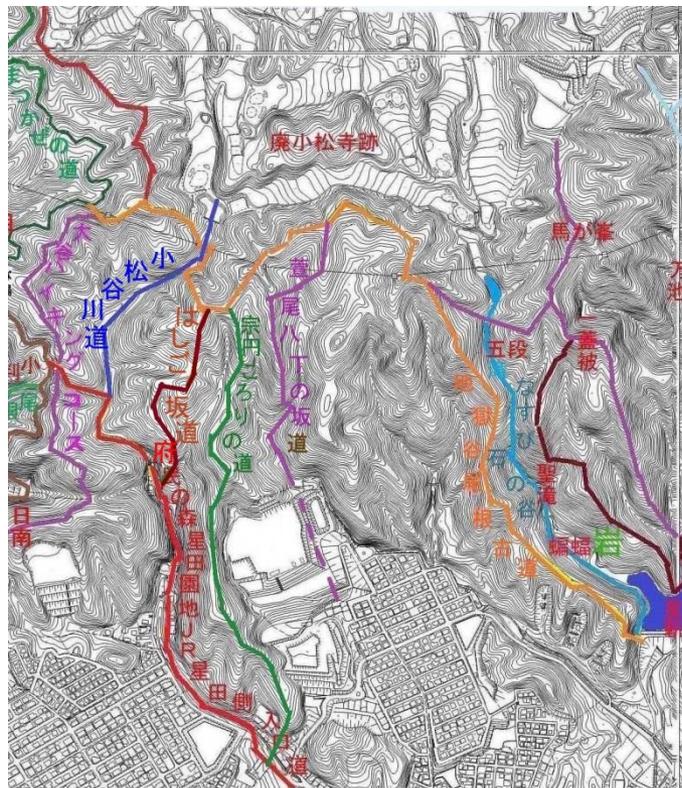
### 南側から見た小松山

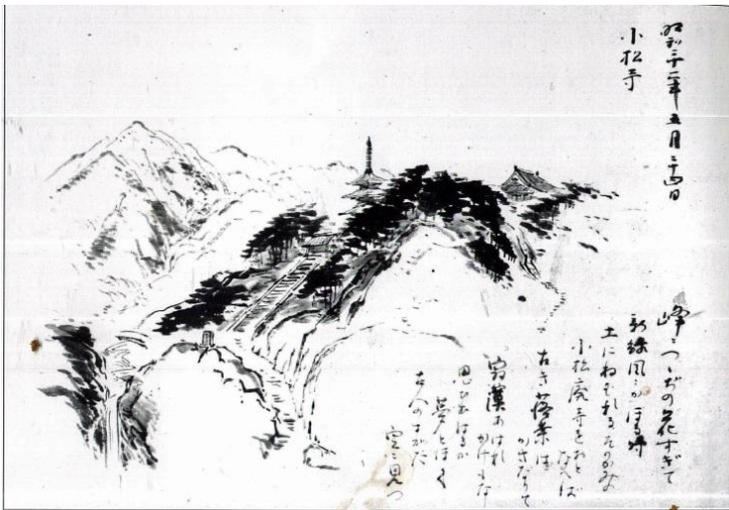
堂跡、鐘堂などの文字が逆文字で書かれているが、文字の方向にそって見た絵図である。小松山を南から見ると昔主要伽藍が建っていた小松が谷の懸崖やその石積み、南の大門からの階段の入口道、堂跡などの遺跡など重要な部分の遺影が見られたので、小松山の南斜面は南から見た絵図を描いたのであろう。

## 里山の東部



## 廃小松寺とその参道





昭和22年に郷土史の先駆者である片山長三先生が書かれた小松寺。当時は原型がかなりの程度に残っていたのであろう。



上は、茨尾の頂上あたりから見たゴルフ場4番コースの向こうに残っている小松山の中核部。下は西の大門があった西門坂の想定図。右は、明治43年作成原図に合わせた現在見かけ上残っている小松山(太い線の部分)



小松寺の伽藍等の施設配置 (小松が谷の懸崖の上部台地) 根本草堂、金堂、講堂、宝塔、鐘楼、経蔵 (東谷)宝蔵 (南谷)御倉 (西谷)食堂、井戸 (北谷)毘沙門堂、閼伽井 南の大門、西の大門 北の小門 戌亥角矢土 丑寅角大池 未申角小池 辰巳角湯屋 金堂前蓮池 講堂前矢土 坊舎67宇



茨尾の坂道の頂上に建っている標識



# 伽藍配置想定図資料編

小松寺縁起とは統群書類従に記載されているもので、統群書類従とは、平安末期に東寺で記録されたものから応永年間(1394~)に塙保己一検校により筆写されたものである。

大谷 7、小谷 19、大道 3、小路 5

根本草堂(本尊観世音菩薩。) 金堂(本尊弥勒菩薩。) 講堂 宝塔 鐘楼 経蔵 西の大門 北の小門 東谷宝蔵 南谷御倉 西谷食堂 北谷閻伽井 戊亥角矢土 丑寅角大池 未申角小池 辰巳角湯屋 金堂前蓮池 講堂前矢土 食堂前井 閻伽井上毘沙門堂 坊舎67宇 僧衆120人 兒童(小僧)38人 と書かれている。

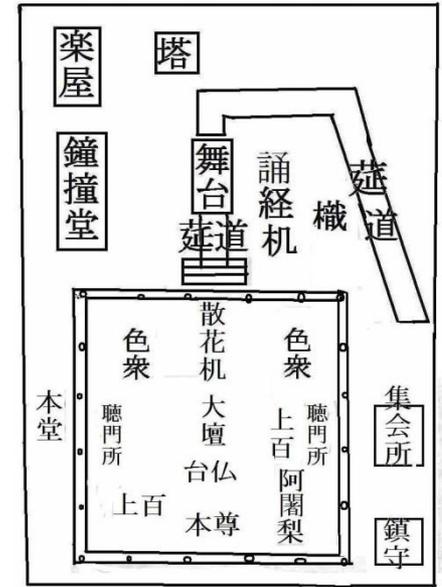
(廃)小松寺の創建とされている天台宗学徒の荒山寺は、3尺のお堂に9寸の観音堂であったとされている。

925年に夫小松影光のために秦の姉子が7間四面の草堂を建てて寺名を小松寺と改名した。

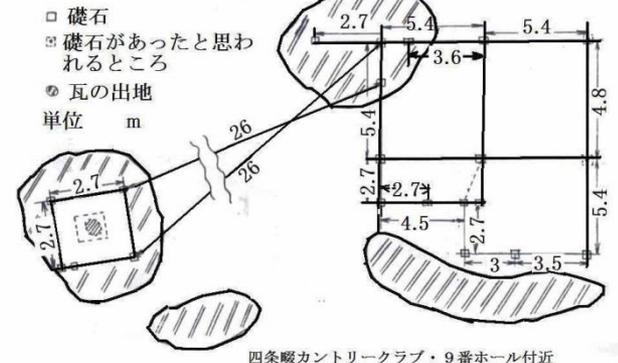
931年に2間四面の金堂、938年に講堂を寄贈を受け建設し、968年に11間の食堂を建設したとされている。

しかし数次に及ぶ地震、台風による崩壊や再建等の経由も記載して長い歴史の中いろいろな変遷を経ているであろう。

第4図 廃小松寺の本堂、三重の塔、釣鐘堂等配置図(長祿4年一1460年3重の塔建設供養会の会場とその付近図)



第4図 小松寺跡礎石状態



四条畷カントリークラブ・9番ホール付近

## 軒丸瓦(左)と並状軒平瓦



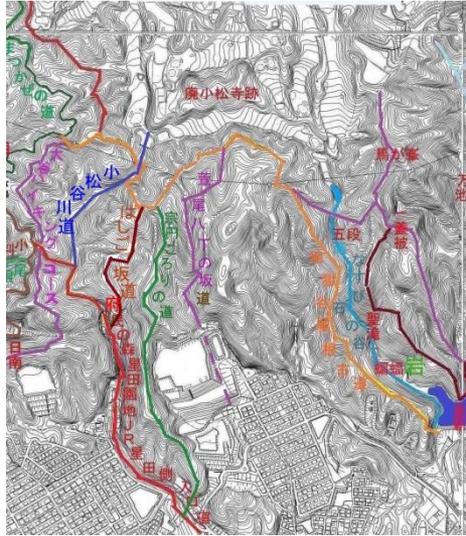
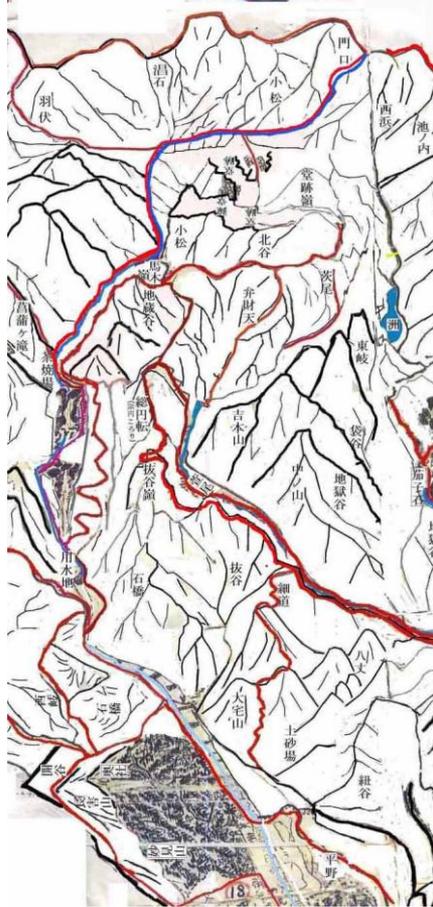
小松寺草堂にあった十一面観音  
小松寺は、江戸元禄期の一七〇三年の廃寺の際草堂にあった本尊十一面観音を星田神社に移したが明治の廃仏毀釈のとき、再度星田寺に移され現在十一面観音堂に祀られている。交野市指定文化財



### 妙見山東の墓地(延命地藏)

果樹園にするべく土地を購入した人が掘削中にでてきたもので協賛者によってお堂を立て愛護されている。古いもので鎌倉、室町時代のもはあるが、江戸時代のものはない。五輪塔、一石五輪塔、舟型板碑等立派なものが多く、200を数える。庶民の経済力では建てられるものではなく、小松寺の上級僧侶の墓とされている。

# 廃小松寺への参道



**総円転(宗円ころり)の道。**  
 宗円ころりとは、室町時代応仁の乱の頃に、小松寺の眞主であった宗円が、険路であるこの場所で、誤って谷底に落ちたが、首にかけていたお地蔵さんのお守りのご利益で一命をとりとめたということが評判になり、この地を宗円ころりと呼ぶようになった。



**萱尾八丁の坂道**  
 ほとんどの星田の住民が使った道であるとされている道である。傍示川(厳密には、星田新池から合流地点から上流は地獄谷川といった。)に沿った地名(小字名)は、萱尾といい、昔は、地図の吉本山の東を南に向き谷沿い道を進み、尾根筋に道を変えて昇り、茨尾の坂道の頂上から西の大門を通過して小松山に入った



この山頂は、高さ270mで、星田山の馬が峯と並んで、山頂扱いされている人気のある山であるが、明治の地図では東岐という地名でかかっている山である。しかし、この山にはルートが書かれていない。ここには、関電の送電線が建っており、その建設によって周辺道の新設を含めて近年に整備されたからであろう。

## 小松谷川道



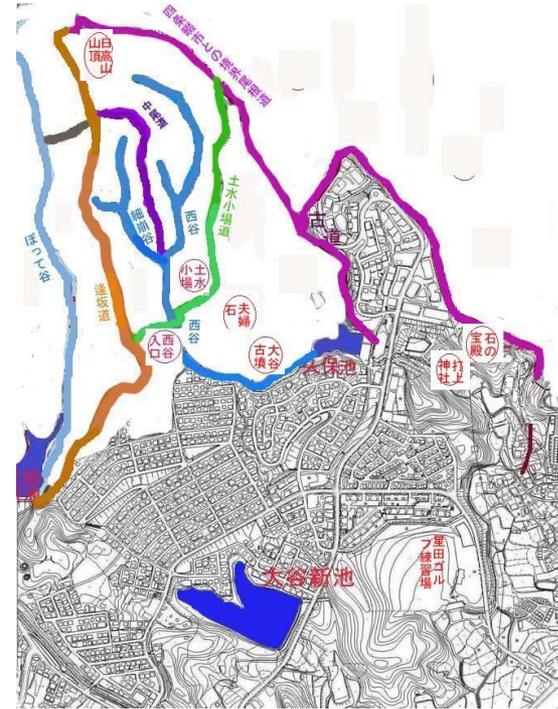
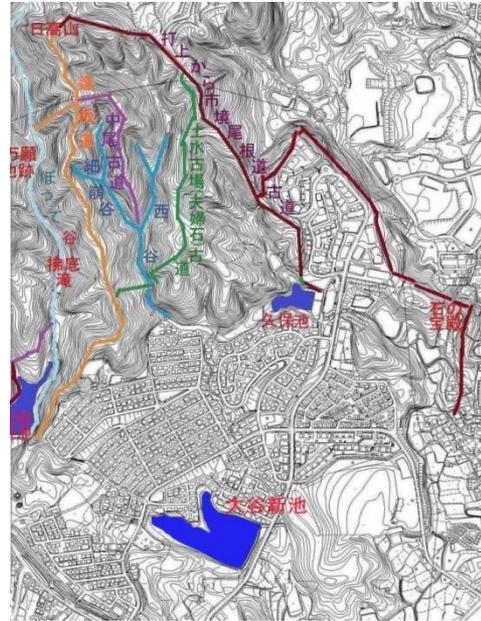
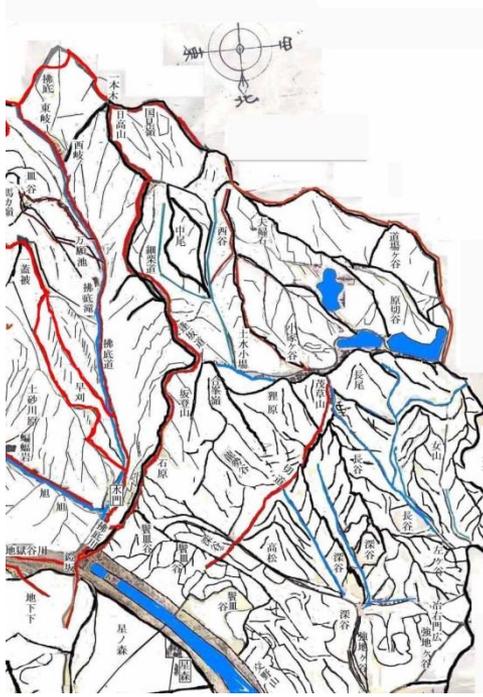
**はしご坂道**  
 小松寺参道の一つで菖蒲の滝の北側から尾根道を登っていく道で、急坂になっており、昇り口で7~8回ジグザグに方向を変える道ではしご坂という。現在でも菖蒲の滝から妙見川の少し下流の山側に写真の堰堤がありその上に道がついているので越して行くと、昔のままの山道が残りやすい

菖蒲が滝とはしご坂道の滝

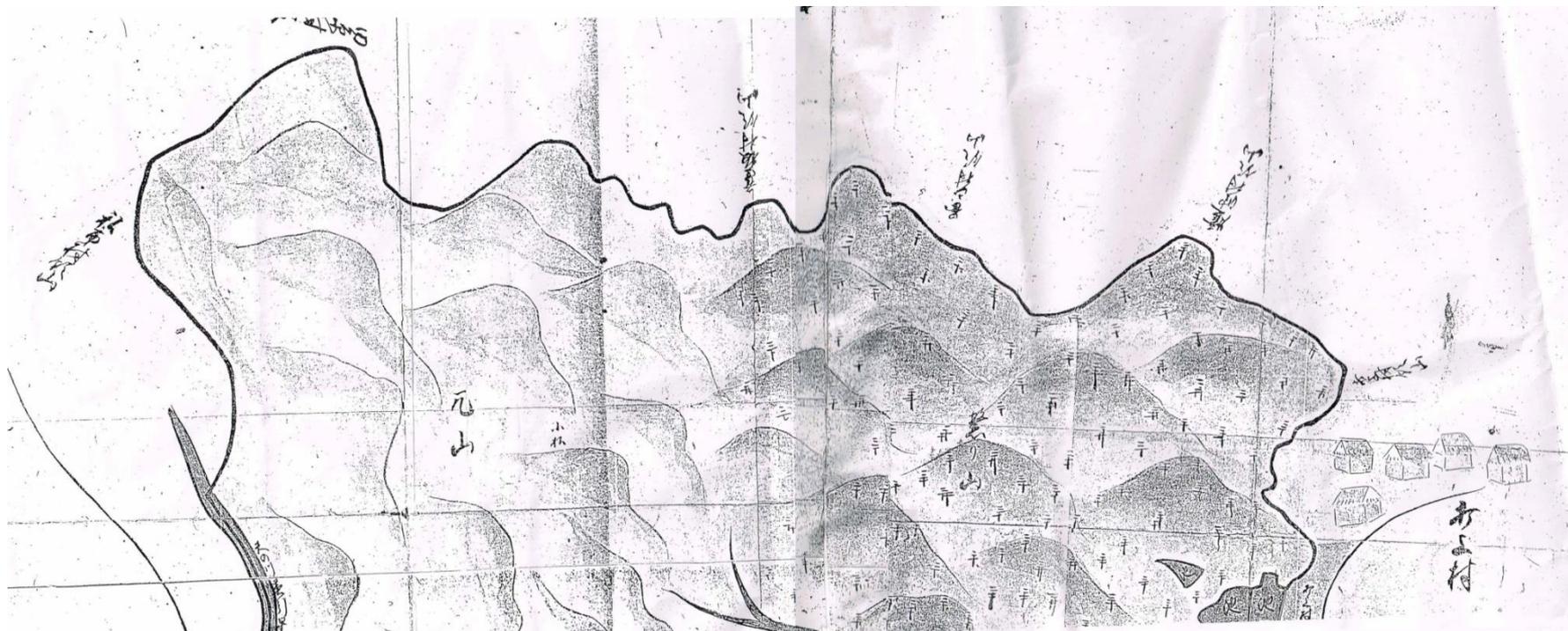
絵図で菖蒲が滝ともう一つの滝が連続して描かれていて、この滝ははしご坂道の登り口にあった滝で現在は、残りに残りに堰堤にかわっている

上の写真は現在の写真で手前が中の山で奥が吉本山、間に背の高い擁壁がある。しかし吉本山の向こうは大阪通信大学グラウンドになっていて閉鎖されている。帯を形成していたこともあって目立たない存在であったこともあるが、ここには、関電の送電線が建っており、その建設によって周辺道の新設を含めて近年に整備されたからであろう

# 里山の西部 逢坂道、西谷と久保池



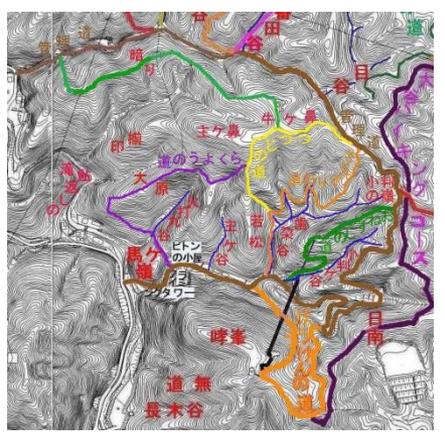




## 天保八年の星田村絵図

ぼって谷の向こうの山は、繁り山、同谷から天の川に向けての東側は禿山と描いている。

下段図は、左側から天の川、ぼって谷となすび石の谷と打上神社の池、久保池(両者とも打上村の飛地)、打上村の集落が描かれていて上段村境の向こうに私市、田村、逢坂、岡山、燈油の各村の山と描かれている。



上田原(四条畷市)



# ピトンの小屋と



# i-フィルター 6.



### さえずりの道

やまびこ広場の前から深い齒朶谷と小判の谷の間の尾根道を下る。両谷は先で合流していて、合流点からは谷沿いの道になる。東からきたつつじの道と合流し管理道へ

### つつじの道

展望デッキの少し東側の若林に向かう尾根筋を下る。途中東の大原に向かうらくようの道にわかれ、少し下って西に巻いて進むとさえずりの道に合流する。

### らくようの道

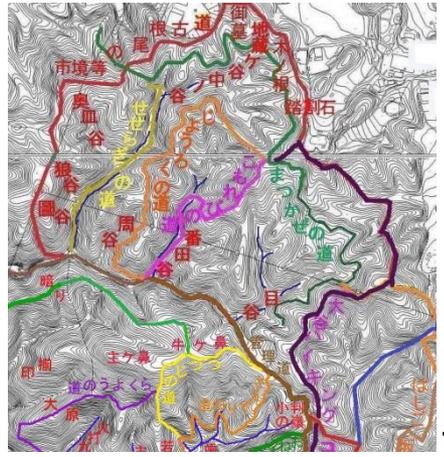
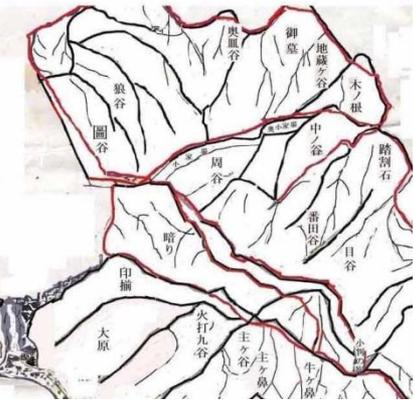
南谷地区では、管理道から南谷へ上下に昇り降りするルートが多い中で、管理道を除いて唯一東西に歩く、比較的長いルートである。つつじの道から分離したあと、大原の尾根筋に向かい、天の川の手前をピトンの小屋の裏の火打九谷を横切り、ピトンの小屋で終わるルートである。

### おねすじの道

管理道から星のブランコの南側の支柱の手前から尾根道を下り、谷沿いに南谷の管理道に通ずる道

### ぼうけんの道

星のブランコの哮が嶺側の管理道に通ずる道。



## じょうろくの道



## こもれびの道



## まつかぜの道

まつかぜの道  
 やまびこ広場から飯森霊園出入口を結び、大谷地区の北部から西部に連なる、四條畷市や旧近隣の小字との境界の尾根筋に近いところを結んでいる比較的平坦で、長い道である。高低差の近いところを這うように迂回しながら道がつくられているため、距離が長くなっているが、山道というより散歩道に近い平坦な道である。

せせらぎの道  
 中ノ谷に沿った谷沿い道である。終盤中ノ谷から別れ、飯森霊園出口につながり、また、まつかぜの道とも連結している。明治の地図には小屋口、奥小屋口と記載されており、このあたりは、石切場の作業場であった。ルートの入口(下図左)と中程に次のような象徴的な工作物が。現在でもある



## せせらぎの道



## 尾根古道 大谷ハイキングコース



まつかぜの道は、やまびこ広場から直接でているが、管理道を少し南にくだったところ、目谷にかかっている八つ橋からも入れる。

